【書　評】

柴田　武「言語地理学の方法・附、別冊地図集」

鏡味明克

本書は言語地理学の方法がさかんに適用されるようになった近年の国語学界にとって、まさに渇望の書であったといってよい。本書は二つの意味において、待望の書である。まず近年の実地調査を踏まえた、言語地理学の方法を論述する決定版の単行本が、研究書としても概説書としてもなかったこと、次に、わが国のいわゆるしらみつぶし的全集落調査のパイオニアである糸魚川（イトイガワ）言語調査については、今までに数十の報告が出ていて、さまざまの研究方法の刷新・開拓がなされてきたが、その糸魚川の成果を一冊本にまとめ、体系的に論じる形はまだとられていなかったこと、この二つの点の渇望を満たす書として、本書の刊行の意義はまことに大きい。

言語地理学を専らとする単行本についてわが国のこれまでをふりかえってみると、まずヨーロッパの言語地理学を紹介した江実氏の「言語地理学」（昭10）を最初として、ドーザの「言語地理学」（1922）が松原秀治氏により訳出された（昭13・改訳昭33）。わが国における実地調査によっては、上野勇氏「方言地理学の方法―赤城南麓方言分布―」（昭16・柴田氏は本書を挙げておられないが）、土川正男氏「言語地理学―日本方語の歴史地理学的研究―」（昭23）があり、言語（方言）地理学と銘打ってはいないが、柳田国男氏「蝸牛考」（昭5）、小林好日氏「方言語彙学的研究」（昭25）が周知のように、わが国の材料を使っての本格的な言語地理学的解釈の先駆である。（ほかに藤原与一氏の A Dialect-Geographical Study of the Japanese Dialect（昭31）という「言語地理学的研究」と題した地図集がある。）

すなわち、言語（方言）地理学と題するわが国オリジナルの研究書としては実に昭和二十三年以来のことで、久々の書ということももちろんであるが、既刊のものとは全くちがった、言語地理学の一般言語学における意味を真に問い、かつ実際研究でそれに答えた、決定版となっているのである。

柴田氏としては、今までに糸魚川調査について数多くの論考を発表された他、言語地理学の方法を解説しては、すでに、方言学講座、第一巻、総論（昭36）に「方言学と言語地理学」を、また、日本語の歴史・別巻・言語史研究入門（昭41）に「言語地理学の寄与」を、ことばの研究・第二集（昭40）に「言語地理学の方法と言語史の方法」を書かれた。本書はこれらの発展として、柴田氏の考えの集約が示されたすぐれた研究書であり概説書であり、兼ねて、

糸魚川調査の今までの研究の累積が一応のまとめの形をとった一冊本の糸魚川地域の言語地理学的研究書ともなっている。このように、本書は二面の性格を有している。

本書は入門書としても有益であるが、通常の入門書よりはハイ・レベルである。言語地理学の発達史や基礎的な術語などについてはあまりくわしく説明していない。それらの常識的な知識は本書を読む前に必要だと思われる。本書によって言語地理学について全くはじめて読解することも十分可能ではあるが、言語地理学についておおよそは知っている読者がその考え方について本書の系統的な解説により、言語地理学について再認識を得、あるいは地理的研究に志し、あるいは文献による研究を補強するという立場で読まれる場合に、最も有益な必読の書と言えるであろう。

糸魚川調査の報告書としては、研究方法の序列の上で系統立てた展開になっており、材料（地図）もその線にそって重点的に抽き出されているので、調査内容の中では中間報告的になっていることはやむを得ない。その点の順序立ったまとめは「糸魚川言語図巻」の完成にまつわけである。ゆえに糸魚川調査報告書としての本書の価値は、中間報告という意義ももちろんあるが、同時に、「糸魚川調査入門」であり、また糸魚川を例とする「全集落調査入門」という点にあると解される。かくの如く、本書は種々の角度から読める、示唆するところの甚だ多い本である。

糸魚川言語調査についてはすでに数十の発表によって著名であるから、多言を要しないが、簡単にその要点を述べることにする。これは一九五七・五九・六一年の三回にわたって、柴田武、徳川宗賢、W・A・グローターズ、馬瀬良雄の四氏によって行なわれた新潟県糸魚川市、同西頸城郡青海町の各全域と、それらに隣接する長野・富山県の県境地域について、全集落（一三八地点）を探訪した言語地理学的調査である。この東西両方言の接触地帯を一つのサンプル地区として、言語地理学の方法をわが国において本格的に適用し、その方法の妥当性を確かめ、さらに新しい方法を見出そうとするものであった。この調査に関しては、各メンバーによって雑誌論文などにより数多くの研究が発表されているが、本書はこの糸魚川調査の「成果をまとめる過程で、言語地理学の方法の一般言語学的意味を考えてみたもの」（はしがき）という。本書の外形的な意義は前述したが、本書の内容を貫く原理は、糸魚川研究の実践を通して得られた、言語地理学が他律的な、比較言語学の救援方法から出て、自律的な「人間と言語」との関係を追求する「言語人間学」のにない手になったことの認識とその主張であろう。糸魚川調査の全資料は地図七百枚以上を含む「糸魚川言語図巻」として今後まとめ上げられることになっており、本書の別冊図百八枚（うち糸魚川図九十六枚）はその単行本の形での、最初の概報ともいえるものである。

本書の構成は次のようになっている。本書は五章から成り、1、言語地理学の目的と方法、小節を1.1 言語地理学という方法、のように示して、別冊の図は本文の章節番号と対照するようになっている。すなわち、第一図にあたる図は 1.3-1 で、一章三節中の第一図、という表わし方になっている。

第一章は言語地理学の方法、基本的仮説、地域社会の等質性と異質性、の三節から成る。

第二章は「言語史を構成する手がかり」と題され、地理的分布か

ら言語史を構成する手がかりを、分布の形の見かた、年層差、使用語と理解語の関係、物・事柄の性格との相関性、話者の内省報告の利用等々列挙して解説している。

第三章は「言語地図から言語史へ」である。本書の生命である各図の解釈は主としてこの章で行なわれている。まず、言語地図のありかた、えがきかたについて述べ、単なる資料そのままを見せる地図ではなく、解釈の結果、すなわち、歴史の推定を表現し、結論を読ませる地図が必要であることを強調する。そのために、地図のえがきかたに作図者の腕がふるわれなければならないと主張する。つづいて、糸魚川調査の目的、方法、地域等の説明を経て、三章の主体である分布図の解釈例に入る。「こけこっこう」「きのこ」「肩車」「糠（これは下北半島の例）」「額・おでこの人」「薄氷・氷・氷柱」「おたまじゃくし」「モンペ」「旋毛・蟻地獄・蝸牛」「ガ行鼻音」「拾った・払ったなど」「捨てるなど動詞群」の十二項八十九枚の図についてである。

本章前段の調査方法の叙述で注目されるのは、くわしい地域解説によって、言語分布の場を明確に浮き彫りにしていること、調査者による採集資料の個人差などをきびしくふりかえって反省するなど（一三七ページのガ行鼻音の項にもこれがみられる）、材料を過信せず厳正さを求めていること、などであろうか。図の解釈はいずれも現在の言語地理学の最高の水準を示すものばかりであるが、大きな特色として、すぐ近道の解釈を呈示するのでなく、あえて試行錯誤の過程を示し、図のかき変え例や、反証の試みとそれが成り立たない理由などをくわしく論述しているのである。このへんが概説書の概説書たるゆえんであろうし、本書の教育的価値を大ならしめているゆえんともいえるであろう。とりどりの特色を持つ各項の解釈の中で、「おたまじゃくし」と小学区との関係、「モンペ」の方言形の、種類、はく時、入って来た時期、どこから来たか、材料、柄などの民俗地図との重ね合わせ解釈（モンペの種類の写真も添えられている）、信州弁が北上してズーズー弁地域を断ち切ったとの推定、動詞の分布図を重ね合わせての、ジリエロンの「各語はそれぞれの歴史を持つ」という命題の再検討等が白眉であろうか。

四章は「構成される言語史の性格」である。言語地理学の歴史は徐々に変化する中間の段階を一つ一つおさえる歴史であり、全体の変化は部分に始まること、全集落調査の意義もそこにあることを力説する。また、文献言語史学とのつき合わせの例として、「しもやけ」「（花の）かおり（図は「におい」）」をとりあげている。いずれも引証もくわしく、言語地理学的解釈から、文献中で古語とみなされてきた用例を疑うことのできるケースを引く（一七六ページ）など創見に富むが、結論に未確実の部分を多く残す点で、さきの氏の論考「言語地理学の方法と言語史の方法」（「ことばの研究」第二集・昭40）が「ほくろ」「あざ」などの「日本言語地図」の分布を文献に徴して明確に関連づけたのに比べてやや迫力を欠くようである。

五章は「今後の言語地理学」で、ここで、糸魚川調査などの発展としての今後の展望が語られる。文献言語史学の補正と言語地理学による検証、構造言語地理学―すなわち体系の地図化による歴史構成、民俗学との関係、など。そして、言語地理学が言語を使用し、創造する人間の心理や社会的関係をさぐることに大いに係わることを強調して、「言語人類学」ないし「言語人間学」という総合的な

文化科学の中で、言語地理学が基本的な役割を果すことになろう、と結んでいる。

別冊地図集の中核をなす糸魚川図は主として16×11センチ大、刷りは黒一色、各種のゴム印による図形記号を用いて、氏の強調する解釈結果を示し歴史的な動きの読みとれる地図への苦心の成果を示している。糸魚川図はわが国の全集落調査図のパイオニアであり、範たるにふさわしい見事な作図例が多い。しかし「日本言語地図」をはじめ、近年の言語地図の描法の進歩、「言語地図学」とか「言語製図学」の名称も起こりつつある今日として見るとき、なお今後の「糸魚川言語図巻」において改良を期待したい点もいろいろと見られるようである。

本書の問題点、疑問点について。まず、本書は3.1、3.2の言語地図と糸魚川調査の解説を読んでから一章に戻るのが便利である。むろん糸魚川を材料としつつも大綱は理論の本だから、このような展開になったことはわかるけれども、糸魚川調査について未知の読者が一・二章を読む場合は、とびとびに出てくる糸魚川の材料による説明がつかみにくいのではあるまいか。同様な読者に対する配慮の不足は地図集に地域概要図がないことにも現われている。地域概説はくわしい。しかし、概要図がないために、例えば、川の説明で「東から早川・海川……」と八本の川をあげているのに、ベースマップには六本の川しか書いてなくて（歌川と外波川が図にないのだが）、地形図を参照しなければ、どれが何川だかわからない。また、特殊な地点をあげる時は地点番号で明解であるが、多くの叙述に使われている根知谷・能生谷・浦本（浦本のごときは地域概説にも触れられていない地区名）等の地区名は、一々地域概説の文章に戻ったり地形図を見ないと図上で読めないのである。第一図として地域概要図を用意することはぜひとも必要であった。

次に、地図の冒頭は三枚にわたるインフォーマントの異動図であるが、これは説明文や表だけで十分ではないだろうか。地域的なかたよりがないということを見せるだけの図である。次の「くすりゆび」三図の比較で十分であるし、1.3-9図のように、インフォーマントも語形も変った地点のみマークして、それが微小であったことを示せば足りる。一九一ページにもいうように「変遷がなかったということも言語地理学が獲得する情報の一つではないかという議論もありえよう。しかし地域差のない地図は無意味である」のである。

「言語の変遷は語を最小単位として起こる」という命題（一一ページ）、これは最小とは限らず、語を「基本単位として」ではないか。例えば本書中の「こけっこっこう」は keke- 等の語構成要素によって流行が動いているようだし、語末の音節がそのはたらきを持つ場合も報告されている。（糸魚川調査の材料を用いたグロータス氏の「もぐらのしっぽ」日本語・5—1など）

四八ページに引かれている諸本に「民衆語原はとりあげるに足りないものだという考えがある」というのは当たらないのではないか。なぜなら、それらの書は、ここでいう言語変化のきっかけを作る民衆の語原意識を採り上げることについていっているのではなく、語原研究者が民衆語原的な、非通時的解釈をする誤りについていっているのだからである。

糸魚川地域の解説（六四ページ）のゼンドーは「善道？」とあるが、道の名としては奇異である。海道（カイドー）に対して山道（センドー）の語があるか

ら、山の道なので、それか又は、～山道（ゼンドー）の略ではないだろうか。

図の解釈例に移る。「薄氷」などの分布図、関連語彙の重ね合わせ、語彙体系の地図であるが、図に「厚い氷」（3.8-2）とあるのは本文によれば「氷一般の称」である。この解釈文を読むと、「氷一般―いわゆる「こおり」―」と「特別あつい氷」との両方の図があれば、解釈ももっと踏み込めたのではないかと思われる。一〇五ページに、すべてをカネコーリとよぶ地点を「寒気が厳しいために、固さ、厚さの名の区別がない変種」とみているが、そうかも知れないが自然環境による規定を考えることは慎重でありたい。一地点の変種ではないし、あるいは名称未分化の古い体系で、コーリの強調としてのカネコーリを区別なしに用いたものかも知れないとも思われる。また、3.8-4 図は構造の図示に苦心が払われているが、見やすい地図ではない。記号凡例の丸の中の黒はカネコーリであるが、図上の記号の黒白には統一的関連がない。むしろこの円グラフ的記号のまま簡潔に示すほうが、カネコーリ対ザエ・ガサ等の消長がよくわかる。（5610-9987 と 5621-8588 の地点だが㊽は何だろう。「薄氷」の図では前の地点はブランク、後はガサである。）もし丸のままを記号として生かせば、氷柱は全部カネコーリだから㊹はいらない。①でよい。そして黒対斜線・網目等で区別すればよい。

3.11-4 の反復形の図。数種の反復形の例だけでその好まれる放射中心を田海川と比定することは危険ではないか。やはりこれも田海川を含めて広く糸魚川町部付近中心なのではあるまいか。この図は■は三つともある地点、◣、◤は二つ持つ地点らしいが、その説明が図にも本文にもないので、一見凡例から脱落した語形かと思ってしまう。

「拾った」「払った」などの分布図の解釈には疑問の残る点がある。ハラ（一）タがハロ（一）タと信州のハラッタとの混交によるものとすれば、なぜ信州にじかに隣接する地域がハラ（一）タでなくハロ（一）タで、むしろ糸魚川から放射するごとくにハラ（一）タであるのか。次の「高く」の図のタカーについても同じ分布である。この混交を認めるとしても、あるいはこの混交は図の中の信州のハラッタとの混交ではなしに、糸魚川以東の図外のどこかでハラッタと混交してできた分布の連続ではないかとすら思える。本書によれば東からの伝播例はほとんどないのかも知れないが、東どなりの図が見たい例である。（3.14-1 図のタコー・タカー並用の二地点ともタカーの方が古いという意識がでている。これを内省にも誤りのある例としているが、これもかなり古い分布の西端であることを物語るものかも知れない。）

4.1-1 図の kiN→kinu も、もともとは kinu→kiN→kinu かも知れない。回帰もまた民衆の合理化の一つである。「間食」の 4.1-2 図の語原解釈は試論的でなお疑問が多い。とくにサナブリを魚のブリとする解。（ふつうはサ（田）ノボリ（上り）の意とする。）

文献言語史学とのつき合わせ例。「しもやけ」「かおり」ともに未確実の部分を残す。なお霜ばれの古例は「毛吹草」1645 等にもある（誹諧四季之詞・霜月）。「にほひ」「かおり」「か」の先後についてもなお再検討を要する。たしかに、香の意の「にほひ」も万葉に見えるが、「にほひ」が主として視覚的であり、「丹穂」など「赤」の意識を思わせる用字が多かったことなども兼ねて考え合わせながら。

次に、地図の表現方法について通観したい。大部分の図は分布の動きをよく表現した、すっきりしたすばらしいでき上りである。た

とえば 3.5-1〜4 の「肩車」の各図、3.9-1〜3 の「おたまじゃくし」「めだか」など。しかし、全般の傾向として次のような不備にも気づかざるを得なかった。主な点は次の三つである。

一、大きすぎる記号が図を見づらくしていること。このような詳細地点図の場合はとくに配慮を要する。仕上りがきたなくなるし、ことに黒のツブシは小さくてもよくめだつのだが、それの大記号が実に多い。ことに大きすぎてくっついてしまった二つの記号に他のもう一つの記号が埋れてしまう場合は問題である。3.7-2 や小さい記号だが 3.13-1 などはそのはなはだしい図例である。1.3-4,5,7,8 や 3.10-4, 4.1-2 なども見づらい図である。3.11-1 や 3.11-3 などは大きい記号があっても見づらくない。記号が分散しているからである。

二、「ある語が西から東へ伝播したと推定したときには、その語に与える符号は、方向を示すような形を選び、それを東向きに印すべきである。」（六〇ページ）という方法が実践されていない。見るところ、そのとおりの効果を示しているのは 3.7-1 と 4.1-1 の図だけである（1.3-4〜5 図は解釈がないから除いて）。不適切なもの。①矢印方向が推定の方向の逆に見える図。3.8-1（シガ・能生→早川）、3.9-4（ギャワズが山間から北上したとは解釈されていない）、3.10-3（モンペは小滝から来た、の矢印が出元の小滝の方を指している）。②矢印を用いるのが不適切な場合。3.12-02 以下の g 音の矢印は g∨ŋ の意味では図のように g→ŋ だが、分布の動きそのものは ŋ の増加だから、その意味では ŋ の記号のほうを矢印にして、それが谷をのぼる図式のほうがよいのではないか。③方向性の識別力に乏しい矢印的記号が使われているもの。3.3-5 図の▼は左（越中）からの→だが、▼はそにも似て右からの←という逆の印象が強い。

三、関連図において同語形の記号は各図で統一すべきである。3.8-1 と 3.8-2 のカネコーリ・ガス・ガサ・シガ、3.10-1 と 3.10-2 のイッコギ・イッコミ・フミコミ等々の不統一が見られる。3.13-2 と 3.14-1 の⊕と⊕も同じ現象に対して記号を変える必然性があるのだろうか。（むしろ二図とも□だけのほうが見やすく、すっきりするだろう）

以上若干の問題点・疑問点を挙げ得るとしても、全体として本書の方法論と各図の解釈はゆるぎのない、構成のがっちりしたものであり、その論証の鮮かさ、洞察の深さに打たれる。わが国における言語地理学の到達点を示す書として、われわれ方言研究者は十分味読し、柴田氏による言語地理学の方法の思考を吸収すべきであろう。また、学生諸君に対して、「言語地理学を学ぶならばこれを読むがよい」と自信をもってすすめられる指針の書を得たことをほんとうによろこばしく思う。

糸魚川調査の全資料が出そろう、予定されている七〇〇枚をこえる図を収めた「糸魚川言語図巻」の完成が待ち望まれる。（A5判、一九八ページ、別冊（地図集）A5判八八ページ、図一〇八葉、昭和四十四年八月三十日発行、筑摩書房、二千五百円）

—岡山大学講師—